

タイトル	イマヌエル・ヴォルフ「ユダヤ学の概念について」 (訳者解題と抄訳)
著者	佐藤, 貴史; SATO, Takashi
引用	北海学園大学人文論集(70): 127-144
発行日	2021-03-31

# イマヌエル・ヴォルフ 「ユダヤ学の問題について」(訳者解題と抄訳)

佐藤 貴史

## [訳者解題]

ここに訳出された論文は、Immanuel Wolf, “Ueber den Begriff einer Wissenschaft des Judenthums” in *Jüdische Geschichte lesen. Texte der jüdischen Geschichtsschreibung im 19. und 20. Jahrhundert*, herausgegeben und kommentiert von Michael Brenner, Anthony Kauders, Gideon Reuveni und Nils Römer (München: Verlag C. H. Beck, 2003), 346-352 である。1819 年、エドゥアルト・ガンス (Eduard Gans, 1797-1839) やレオポルト・ツンツ (Leopold Zunz, 1794-1886) などが中心となり、そしてのちにハインリヒ・ハイネ

(Heinrich Heine, 1797-1856) も関わることになる「ユダヤ人文化学術協会」(Verein für Cultur und Wissenschaft der Juden) がベルリンに創設された<sup>1</sup>、本論文はこの協会の学術雑誌である『ユダヤ学雑誌』(Zeitschrift für



<sup>1</sup> ユダヤ人文化学術協会の設立状況や思想については、ハイネ研究のなかで言及されることが多い。たとえば Edith Lutz, *Der »Verein für Cultur und Wissenschaft der Juden« und sein Mitglied H. Heine* (Weimar: Verlag J. B. Metzler, 1997)；木庭宏『ハイネとユダヤの問題——実証主義的研究』(松籟

die Wissenschaft des Judenthums; 前頁の画像)に掲載されたものである<sup>2</sup>。ここでは底本にしたがって、テキスト全体ではなく、その一部を抜粋して訳出した。

著者のイマヌエル・ヴォルフ (Immanuel Wolf, 1799-1847) は、19世紀ドイツに誕生した「ユダヤ学」(Wissenschaft des Judenthums)の創設者の一人に数えられる重要人物である。ユダヤ学とは、簡潔に述べれば、ユダヤ教の歴史を批判的かつ文献学的に研究し、ヨーロッパ、とくにドイツ社会やキリスト教会に向けてユダヤ教の世界史的意義を弁証することで、結果的にユダヤ教に対する無根拠な偏見や憎悪に反論しようとした学問である。もちろんユダヤ学者の数だけユダヤ学の定義があるとも言える。それゆえ、ここでは一般的な理解を示しておくことで満足することにしたい。

哲学史やキリスト教思想史の書物を繙いても、ヴォルフの名前が出てくることはないだろう。ドイツ・ユダヤ思想史の研究書であっても、ヴォルフについて多くの頁が割かれることは多くない<sup>3</sup>。ユダヤ思想史研究者で

---

社、1981年)。古典的研究としては、次の論文がある。Sinai (Siegfried) Ucko, "Geistesgeschichtliche Grundlagen der Wissenschaft des Judenthums (Motive des Kulturvereins vom Jahre 1819)" in *Wissenschaft des Judenthums im deutschen Sprachbereich. Ein Querschnitt*, Band I, mit einer Einführung, herausgegeben von Kurt Wilhelm (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1967)。もとは1934年に *Zeitschrift für Geschichte der Juden in Deutschland* に掲載された論文である。

<sup>2</sup> Immanuel Wolf, "Ueber den Begriff einer Wissenschaft des Judenthums" *Zeitschrift für die Wissenschaft des Judenthums* (1822/1823), 1-24.

<sup>3</sup> Michael A. Meyer は、名著 *The Origins of the Modern Jew. Jewish Identity and European Culture in Germany, 1749-1824* (Detroit: Wayne State University Press, 1967) のなかでヴォルフについていくつかの興味深い指摘をしている。またヴォルフのテキストの英訳は、Meyer が編者である *Ideas of Jewish History*, edited, with introductions and notes, by Michael A. Meyer (Detroit: Wayne State University Press, 1987) に含まれている。なお *The Origins of the Modern Jew* は、ヨハン・カスパー・ラファーターがモー

ある D. N. マイアーズによれば、「彼の学問的キャリアは実質的には 1822 年のエッセイ [「ユダヤ学の概念について」] にはじまり、それで終わった」<sup>4</sup>。たしかにヴォルフ自身はその後、ユダヤ学の歴史のなかで積極的役割を果たすことはなく、その姿は見えなくなる。しかし、彼の記念碑的論文「ユダヤ学の概念について」は 19 世紀ユダヤ学研究において必ず言及される重要作品であり、ツンツヤアブラハム・ガイガー (Abraham Geiger, 1810-1874) のテキストに劣らず、19 世紀ユダヤ学のなかでしかるべき場所を占めている。

ヴォルフは、論文の冒頭で *Judenthum* の定義について議論することからはじめている。タイトルで示されているように、彼にとって「ユダヤ学の概念」(*der Begriff einer Wissenschaft des Judenthums*) について議論するためには、まずは *Judenthum* の概念を規定するという学問的手続きが必要だったことがわかる。

ユダヤ学 (*Wissenschaft des Judenthums*) について語ろうとするならば、次のことが自明である。すなわち、ここでの *Judenthum* という語は、宗教、哲学、歴史、法制度、文学一般、市民生活およびあらゆる人間の事柄に関連しており、ユダヤ人の状況、特質、彼らが成し遂げたものすべてを示す総体概念 (*Inbegriff*) として、そのもっとも包括

---

ゼス・メンデルスゾーンに対してキリスト教への改宗を求めた出来事を基調として、近代ドイツ・ユダヤ思想史を描いた優れた研究書である。〈なぜヨーロッパ的教養を体得した人間がユダヤ人にとどまる必要があるのか〉という問いは近代ユダヤ人のアイデンティティを根本から揺さぶるものであり、ユダヤ学もまたこの深刻な問いの前に立たされていたのである。

<sup>4</sup> David N. Myers “The Ideology of *Wissenschaft des Judenthums*,” in *History of Jewish Philosophy*, edited by Daniel H. Frank and Oliver Leaman (London/New York: Routledge, 1997), 711. [「ユダヤ教学のイデオロギー（訳者解題と翻訳）佐藤貴史 [訳]、『人文論集』(北海学園大学), 2015 年, 106 頁]。

的な意味で用いられているのであり、ユダヤ人の宗教だけを意味するような、より限定された意味において用いられているのではない。

ヴォルフによれば、Judenthum はユダヤ人が関わるあらゆるものを示す「もっとも包括的な」概念であり、宗教としての Judenthum をその内に含む「総体概念」、つまり宗教としての Judenthum よりも大きな概念である。このことが Judenthum を日本語へ翻訳するさいに大きな困難を引き起こす原因となっているが、訳語については最後に述べることにしたい。

また、「あらゆる人間の事柄」という表現が示唆するように、ヴォルフのユダヤ学は、神や律法のような宗教的理念だけを特別視せずに Judenthum を理解するものとして構想されていることがわかる。ここでの「人間的」という語は、〈人間に関わる〉という簡潔な意味とは別に、〈歴史的〉という意味でも理解されるべきだろう。つまり Judenthum にユダヤ人が成し遂げた「人間の事柄」が含まれるならば、その成し遂げたという歴史的プロセスも含めて Judenthum の概念が規定されていると考えなければならないのである。

ヴォルフによって概念的に定義された Judenthum はきわめて包括的な現象であり、その包括性によって Judenthum は細分化の契機を内に含むことになった。これに対して、彼にとって Judenthum の細分化に歯止めをかけ、それを基礎づけているものこそ「宗教的理念」であり、Judenthum のなかでは「宗教的原理念」がもっとも大きく働き、人類に多大な影響を与えてきたと考えられている。

彼は、Judenthum の——あるいは Judenthum に内在する——理念を「無条件の単一性の理念」「永遠性のなかで存在するあらゆるものの生ける単一性」「時間と空間の規定の外側にあつて無条件に存在するもの」「神的単一性」といったさまざまな呼び方で指示しているが、それは一言で言えば“YHWH”という神の名によって表現されていると言う。YHWH において十全に示される Judenthum の理念は無条件、永遠性、時間と空間の規定の外側など非歴史的な用語で表現されているように感じられる。しかし、

ユダヤ民族はこの理念を「徐々に」把握していったのであり、そこには人間の認識における歴史的プロセスが密接に関わっているのである。

このように論文冒頭のわずかな部分を読んでも、総体概念としての Judentum や、Judentum の細分化に歯止めかける Judentum の理念は人間の行為や認識に深く関わっていることがわかる。そうであるならば、Judentum が歴史性から離れて措定されることは考えられず、ヴォルフにとって Judentum、そしてそれを研究するユダヤ学は歴史的視点のもとで徹頭徹尾、構想されていると言っても過言ではないだろう。

ヴォルフは、「一つの全体としての Judentum」は「包括的な文献」と「多数の人間から成る階層における特殊な生と網の目」に含まれていると書いている。テキストと社会と言い換えてもよいと思うが、とくに前者の Judentum 文献には「ユダヤ人の特別な世界、ユダヤ人独自の生活様式と思考様式」が書き留められており、批判的・歴史的学問としてのユダヤ学は前者に重きをおいていることが、彼のテキストから理解できる。

「いかにして Judentum が時代のなかで次第に発展し形成されたか」を明らかにするユダヤ学は、「Judentum の文献学」「Judentum の歴史」「Judentum の哲学」という三つの学科から構成されている。それぞれの内容について詳述はしないが、ヴォルフを含めたユダヤ人文化学術協会に集まったユダヤ学者たちのなかにはヘーゲルの学生もいたし、彼の哲学から強く影響を受けていたことはよく指摘される事実である。ヴォルフの論文を一読しても、ヘーゲルからの思想的影響を受けたと思われる部分が多く見られるだろう<sup>5</sup>。

---

<sup>5</sup> ユダヤ学に対するヘーゲルの影響は重要なテーマである。それと同時に、ヘーゲルがユダヤ教をどのように考えていたかという複雑な問題もある。ヴォルフは、ヘーゲル的な歴史哲学を援用しながらユダヤ学を構築していると思われるが、これに対してヘーゲル自身はユダヤ学者が想定しているようなユダヤ教の世界史的位を考えているとは言えないだろう。ヘーゲルとユダヤ教の関係については以下の研究を参照されたい。Yirmiyahu Yovel, *Dark Riddle. Hegel, Nietzsche, and the Jews* (Cambridge: Polity Press,

このようにヴォルフは Judenthum の概念や理念を規定したうえで、文献学、歴史、哲学に基づいて Judenthum の歴史的生成を明らかにする学問活動としてユダヤ学を構想している。しかし、これと同時にユダヤ学は Judenthum の世界史的意義について当時のドイツ社会やキリスト教会に伝えるという実践的役割も担っていた。ヴォルフはこう書いている。

Judenthum の学術研究はユダヤ人の価値と無価値、すなわち他の市民と同等に尊重され、同等の立場におかれることができるのか、またはできないのかということについて決定しなければならない。このような学術研究だけが Judenthum の内的性質を知り、本質的なものを偶然的なものから、根源的なものを加えられたものから分離することを教える。学問だけが低俗な生の党派性、熱中、偏見を越えている。なぜなら学問の目標は真理 (die Wahrheit) だからである。

ユダヤ学はユダヤ人に対する根も葉もない偏見には目もくれず、ユダヤ人が他の市民と同等の立場で尊重されることを目標として遂行される。学問の目標は不偏不党の「真理」であり、真理の前では「利己心、支配欲、ねたみや虚栄心」は意味をなさず、真の学問としてのユダヤ学はこのような敵対者たちの偏見とは関係をもたない。「なぜなら夜は始まりつつある日の前では消えてしまうように、敵対者も真の学問の前では姿を消してしまうからである」。

先ほど、ヴォルフのユダヤ学にはヘーゲル哲学の影響が見られることについて触れたが、ヴォルフは上記のようなユダヤ人の平等性を実践的に確保するために、時代精神を強く意識しながらユダヤ学の学問性に訴えるという方法をとる。

---

1998) [『深い謎——ヘーゲル、ニーチェとユダヤ人』青木隆嘉 [訳]、法政大学出版局、2002年]。

Judenthum の根本原理はふたたび内的な欲求のなかに含まれており、時代精神にしたがってある形態に向けて発展しようとしている。しかし、時代にふさわしい仕方(Zeitgemäß), この発展は学問の方法に基づいてのみ生じることができる。なぜなら学問性の立場はわれわれの時代の独自の立場だからである。

Judenthum は近代という時代にふさわしい仕方(Zeitgemäß)で発展することが望まれており、それによって時代遅れの宗教や生活様式とみなされていた Judenthum は適切な場所をヨーロッパのなかに占めることができる。そして、この発展は「学問という方法」に基づいてのみ生じるのであり、その意味ではユダヤ学において学問は Judenthum の純粹かつ客観的研究という側面と、時代精神にしたがったふさわしい立場に Judenthum を発展させ、近代ユダヤ人に確固としたアイデンティティを形成させる手段という側面をもっていると言えよう。ヴォルフは、「学問性の立場」は「われわれの時代の独自の立場」だと断言し、それは「ヨーロッパ的生の立場」とまで言い切っている。われわれは、彼のユダヤ学構想のなかにヨーロッパのなかでマイノリティとして生きていくユダヤ人の境涯を透かし見ることができるだろう。

もう一度最初の話に戻ろう。ヴォルフは何よりもまず Judenthum の概念を規定しようとしたが、そこにはユダヤ学が引き起こした深刻な問題がある。すなわち、Judenthum が〈「近代」学問の対象としての Judenthum〉と〈信仰の対象としての Judenthum〉の二重性を根本において抱えた概念になってしまったことである(Judenthum を「信仰の対象」と考える点は、モーゼス・メンデルスゾーン以降のユダヤ教のプロテスタント化の問題が背後にある。その意味では、Judenthum は 19 世紀ユダヤ学に先立って 18 世紀のユダヤの啓蒙であるハスカラのなかですでに大きな近代的変化を被っている)。それゆえ、ヴォルフが論文の冒頭で Judenthum の概念を定義しようとしたことは、議論の順番といった形式的問題ではなく、思想的に重大な意味が含まれているのである。19 世紀ドイツのユダヤ学は、み



ずからの研究対象となる Judenthum を「理念」「原理」「本質」などに先立つてまずは「概念」として確定する必要があったのであり、このような学問的手続きのなかにユダヤ学が新しい学問として誕生するプロセスを認識することができるのである。

ヴォルフは「ユダヤ学はあらかじめ抱かれた意見をもたずにはじめられ、最終的結論に無頓着である」と書いている。Judenthum という対象をそれ自体において研究しようとするユダヤ学は、結論よりも対象の概念規定と研究方法に最大限の注意を払う学問である。しかし、このような過剰なまでの学問的客観性の追求によって、ユダヤ学——少なくともヴォルフのユダヤ学——は学問のための方法ではなく、方法のための学問とでも形容せざるをえない奇妙な状況を生み出したのではないか。その意味では、19世紀ユダヤ学研究においてもっとも重視すべき課題は、いささか大袈裟に言えば、ユダヤ学がもたらした結論よりも、ユダヤ学が用いた方法や立場、すなわちユダヤ学を近代学問として成立させ、基礎づけようとした当時のユダヤ学者たちのメタ学問的視点にこそあるはずだと、記者は考えている。

最後に訳語について述べておきたい。拙訳では、Judenthum は日本語に訳さずドイツ語のまま用いている。冒頭におかれた概念の議論から考えても、Judenthum を「ユダヤ教」と訳すと、その意味が狭くなりすぎてしまうだろう。かといって、「ユダヤ性」「ユダヤ人であること」もまた、適切に Judenthum の意味を伝えているとは言い難い。このような判断もあり、結果的にドイツ語のまま用いることにした。ぎこちなさが残ることは十分承知しているが、御寛恕を乞う次第である。また、これに関連して Wissenschaft des Judenthums をどう訳すかという問題もある。上記の方針にしたがえば、「Judenthum の学問」と訳すべきであろうが——事実、拙訳では「Judenthum の文献学」「Judenthum の歴史」「Judenthum の哲学」としている箇所がある——これは「ユダヤ学」と訳すことにした。以前は「ユダヤ教学」と訳していたが、やはり「ユダヤ教」では19世紀ドイツの一大学問運動たる Wissenschaft des Judenthums の繊細かつ豊かな意味を十分に理解できないと感じたので、ここでは「ユダヤ学」という訳語を採

用することにした。一貫性のなさに批判もあると思われるが、まずは鍬を入れることが大事だと考えた。

ユダヤ人文化学術協会の設立からすでに200年が経過した。ここ数年、ヨーロッパやアメリカではユダヤ学に関するシンポジウムが開催され、その内容をまとめた研究書も出版されはじめている。翻って、日本ではユダヤ学の研究はほとんどなされていない状況である。拙訳が少しでもわが国の19世紀ユダヤ学研究に貢献できるならば、それに勝る喜びはないだろう。

〔抄 訳〕

## ユダヤ学の概念について

イマヌエル・ヴォルフ

ユダヤ学 (*Wissenschaft des Judenthums*) について語ろうとするならば、次のことが自明である。すなわち、ここでの *Judenthum* という語は、宗教、哲学、歴史、法制度、文学一般、市民生活およびあらゆる人間の事柄に関連しており、ユダヤ人の状況、特質、彼らが成し遂げたものすべてを示す総体概念 (Inbegriff) として、そのもっとも包括的な意味で用いられているのであり——ユダヤ人の宗教だけを意味するような、より限定された意味において用いられているのではない。たしかに、*Judenthum* をそのあらゆる細分化のなかで基礎づけ、条件づけているのは宗教的理念 (*die religiöse Idee*) である。とはいえ、この理念がいたるところで生に移入され、そしてその生と結びつき、具現化されればされるほど、宗教的理念をそのあらゆる形態と変容のなかで理解しようとしないう限り、宗教的理念を完全に認識し、把握することは難しくなる。もちろん民族の生全体がさまざまな仕方で展開していくとき、宗教的なものの領域からは程遠い側面や方向

性が存在する。しかし、Judenthum においては、人間的生のあらゆる状況に対する宗教的<sup>・</sup>原理<sup>・</sup>概念<sup>・</sup> (die religiöse Uridee) の影響はどんなものよりも明白である。

Judenthum はその当初の創設以来、われわれの時代にいたるまで、すなわち少なくとも 3000 年という期間のあいだ、独自かつ自立した全体として保たれてきた。もちろん外部からの異質な見解もまた、しばしば Judenthum に対して影響力を及ぼした。なぜなら身体世界と同様に精神世界においても、互いに向けて作用し合うことなしに、そもそも二つの物事が同時に存在することはないからである。しかし、Judenthum が異質なものをみずからのうちに受け入れたならば、その異質なものは Judenthum の根本原理 (Grundprincip) に忠実であり、その原理とみずからを同化させ、それと一つのものへ融合しなければならない。同様に、Judenthum から発出したすべてのものは、どこにあっても Judenthum の根本理念の特徴を担っており、あらゆる形態のもとでその特徴をほのめかしている。歴史が疑いなく明らかにしたように、このあいだに Judenthum がみずからの立場において人類に対して行使した影響は計り知れないほど重要なものである。異質な場所において、エジプトの影響のもとで創設されたにもかかわらず、エジプト的な民族教育とはまったく異なる方向性を取ったことで、その内的な独自性にしがたがって Judenthum は、みずから以外の世界に対して異質である状況やその世界から分離している状況につねにとどまっていた。しかし、精神的<sup>・</sup>内実<sup>・</sup> (der geistige Inhalt)、つまり Judenthum の理念 (die Idee) は地球上においてもっとも違いのある諸民族にも伝達された。

さて、きわめて長いあいだ世界史のなかで保たれ、豊かな成果とともに人類の形成に対して影響を与えたこの理念とはいかなるものか。— この理念はもっとも簡素な本性に由来し、その内実はわずかな語で表現される。それは万象における無<sup>・</sup>条件<sup>・</sup>の単<sup>・</sup>一<sup>・</sup>性<sup>・</sup>の理念 (die Idee der unbedingten Einheit im All) である。この理念は、一つの語で言い表される。すなわち YHWH、これはまさに永遠<sup>・</sup>性<sup>・</sup>のなかで存在するあらゆるものの生<sup>・</sup>ける<sup>・</sup>単

一性 (die *lebendige Einheit* alles Seyenden in *Ewigkeit*), 時間と空間の規定の外側にあつて無条件に存在するもの (das unbedingt Seyende außer der Zeit- und Raumbestimmung) を意味している。— この理念はユダヤ民族に啓示されたのであり、すなわち与えられたものとして立てられている。しかし、人間精神がこの理念を普遍性のなかで捉える準備がほとんど整っていないときに、このことが起きたのである。なぜなら、人間は感覚的なものと多なるものから普遍的単一性へ、つまりすべてを包括し〔そこに〕すべてが存在するモノス (*monas*) へとみずからを高める時間を必要とするからである。それゆえ、神的単一性 (*die göttliche Einheit*) の理念は、Judenthum が教えているように、感性の範囲からいまだ高められていなかった民族によってわずかな仕方ですべてを徐々に把握され認識されることができた。神性の理念は人格性と個性の形式のもとでまずはさらに表現されなければならず、その全体的普遍性のなかでただ段階的にみずからを明らかにできた。神的理念は人間のもとでみずからを保存し、ますます精神的に発展し、一つの身体におおわれ、そして人間が認識できるところへと来なければならないし、そうなるはずだった。こうして Judenthum は、精神的なものと神的なものの世界を人間的生の世界と密接に結びつけた。しかし、Judenthum はその最初の啓示のなかで神的なものを表現したが、それは身体世界と比べる術もなく、感覚的形象によっても表現できない生ける精神的単一性 (*lebendige, geistige Einheit*) である。とはいえ、神的理念が囲まれ、その漸次的展開と発展が生じた身体とは — モーセ〔ユダヤ〕的神政政治 (*Mosaische Theokratie*) だった。こうしてユダヤ民族は、かかる神的理念の保護者としての意味において、祭司をもった民族 — 神の民になったのである。〔……〕。

ここで示されたように、一つの全体としての Judenthum は一つの固有の内的原理に基づきながら、一方では包括的な文献のなかに、しかし他方では多数の人間から成る階層における特殊な生と網の目のなかに包含されており、それ自体として学問的に扱うにふさわしく、またそうすることが

必要である。ところが、いまにいたるまで一度も、Judenthum は一つの完全に独立した観点から、その範囲全体のなかで学問的に叙述されたことはなかった。このような仕方ユダヤ人学者がとくに初期の時代に行ったことは、たいていは神学的内容をもったものだった。とりわけ歴史は、ユダヤ人学者によってほとんどすべて無視され放置されていた。しかし、Judenthum の個別的部分の文献的發展に対してキリスト教学者がどれほど大きく貢献したとしても、キリスト教学者はほとんどいつもキリスト教神学を歴史的に伝えるためにのみ Judenthum を論じた。それは、たとえキリスト教学者が Judenthum それ自体を悪意に満ちた仕方て際立たせようとする意図を、あるいはかつて主張されたように、[Judenthum を] 否定しようとする意図をけっしてもっていなかったとしても同じである。一般的・文献的観点と関心から出発した、この分野における重要な学術的業績のいくつかは、もちろんユダヤ神学から区別することが困難なキリスト教神学的手段あるいは準備教育として単に存在するわけではないけれども、これらの成果はつねに対象全体の個別的要素にのみ関係している。とはいえ、Judenthum がその全体的内容にしたがってそれ自体で学問の対象になりうるならば、そして一つのユダヤ学 (eine Wissenschaft des Judenthums) が形成されうるならば、そこではまったく別の論じ方について語られるのは当たり前である。いかなる種類のものであろうとも、その対象の本質にしたがって人間精神の関心を引き、しかもその対象の種々の形態と展開のなかに豊かな内容をもった対象であればどんなものでも、特別な学問の対象になりうるのである。そうであるならば、このような特別な学問の内実は、その対象の範囲全体にしたがった<sup>1</sup>、その学問対象の体系的展開と描写であり、ある異質な目的のためにあるのではなく、それ自体で存在する。われわれはこのことをユダヤ学に適用するならば、その本質にとって次の

---

<sup>1</sup> たしかにある対象の個々の側面は、しばしば内容豊かであるために単独で学問的に論じられる。とはいえ、その対象の部分すべてを連関のなかで余すところなく描写することが完全な学問の本質である。

ようなことが明らかになる。

- 1) ユダヤ学は Judenthum をその範囲全体のなかで理解する。
- 2) ユダヤ学は Judenthum をその概念にしたがって (*seinem Begriffe gemäß*) 展開し〔取り出し〕、個別のものをつねに全体的なものの根本原理へと戻しながら、Judenthum を体系的に描く。
- 3) ユダヤ学はその対象を、ある特殊な目的のためではなく、あるいはある特定の意図からでもなく、対象それ自体のために、それ自体において論じる。— ユダヤ学はあらかじめ抱かれた意見をもたずにはじめられ、最終的結論に無頓着である。ユダヤ学はその対象を、好都合な光や不都合な光のなかにも、また支配的な見解との関係のなかにもおくことを目指すのではなく、その対象がそのようにあるようにその対象を説明する。学問はそれ自体で自足し、それ自体において人間精神の本質的欲求である。それゆえ、学問はみずからの外側に目的とする利益を必要としない。しかし、だからこそ、どの学問も他の諸学問に対してだけでなく、生に対してもまたもっとも重大な影響を及ぼすということはけっして小さくない真実であり、さらにそれはユダヤ学によっても何ら苦もなく証明されうることである。

さて、どの学問もその対象の本質的独自性にしたがってより多くの部分へ分かれるように、このことはまたわれわれの学問においても同様だろう。しかし、まずわれわれの学問は上で述べられた、その対象の二重の開示 (Offenbarung) にしたがって、二つの部門へ分かれるだろう。

#### I. その歴史的・文献的記録化における Judenthum 研究

#### II. 世界のあらゆる国々にいる今日のユダヤ人と関係する統計的 Judenthum 研究

しかし、いかにして Judenthum が時代のなかで次第に発展し形成され

たかということについて、Judenthum はまずは歴史的に、しかしそれからその内的本質と概念にしたがって哲学的に描かれなければならないだろう。両方の描き方は、Judenthum 文献に関する文献学的認識を前提としなければならない。それゆえ、われわれは1) *Judenthum* の文献学、2) *Judenthum* の歴史、3) *Judenthum* の哲学をもつことになる。

1. *Judenthum* の文献学はユダヤ人の文献全体の解釈学的・批判的理解であり、ユダヤ人の特別な世界、ユダヤ人独自の生活様式と思考様式がその文献に書き留められているとみなされる。この文献がさまざまな言語でおおわれ、さまざまな素材を含み、さまざまな時代に耳を傾ける限り、文献学もまたそのさまざまな方法をもつことになるだろう。
2. *Judenthum* の歴史は、*Judenthum* がどのように時代のなかで発展し、あらゆる方向に向かって形成されたかということに関する *Judenthum* の体系的描写である。しかし、このような方向のうちには、とくに三つ〔の方向〕がある。すなわち宗教的方向、政治的方向、そして文献的方向であるが、これらはいたるところでもっとも密接に相互に絡み合っており、諸連関のなかで描かれるならば普遍史を、しかし個別的〔に描かれる〕ならば宗教史、政治史、そして文献史を示している。

時代が経過するなかで *Judenthum* の精神的原理が現すような何重もの立場にしたがって、しかし全体的なものの形成的生命力であるような理念が現れるさまざまな段階にしたがって、歴史はさらに多くの時期 (*Perioden*) に分かれるだろう<sup>2</sup>。

---

<sup>2</sup> 以前ならびに近年の丹念な学者によって歴史分野においても文献学分野においてもすでに成し遂げられているきわめて重要なものとその構成は、蓄えられた素材の一覧表が必要とする生産的な仕事には及ばないものの、たしかに学問を受け入れなければならない。しかし、学問はその重要なもの

3. *Judenthum* の哲学。これはその対象に向けて、*Judenthum* の概念をそれ自体においてもっており、*Judenthum* の哲学はこの概念をその内的理性性 (Vernünftigkeit) にしたがって発展させ、その真理において明示しなければならない。*Judenthum* の哲学は、神的理念が *Judenthum* のなかでみずからを段階的に開示するにしたがって、その神的理念を把握することを教える。さらに *Judenthum* の哲学は、外的な歴史的所与と生ける理念の内的な運動のあいだにある連関を指摘する。— 歴史は諸々の出来事、つまり過去とのみ関わりがあるのに対して、哲学は現在、つまり今日の *Judenthum* における理念の立場をも対象にしている。— しかし、いまなおわれわれの前にあり、生ける形態である *Judenthum* は、Nr. II との関係において、直接的に過去の歴史に加わり、とくにその宗教的・政治的状況を考慮すると、これにはあらゆる国にいるユダヤ人の一般的統計が関連している。

これがもっとも一般的な概略のなかでのユダヤ学の枠組みだろう。— 文献研究、構成、発展に関する巨大な領域！ しかし、対象だけが学問と人間精神一般にとって重要性をもっているならば、つねに進歩する対象の発展もまた止まることはできない。それゆえ、真に学問的感覚は、その対象の多面性や巨大な範囲のために、このような学問の基礎づけの可能性を疑うこともできない。学問の本質は普遍性、無限性であり、ここにあるのはまさにその高貴な本性があらゆる制約、あらゆる停止、あらゆる停滞を排除する人間精神にとって学問がもっている刺激と魅力である。しかし、次のような問いが投げかけられる。すなわち、このような *Judenthum* の学問的取り扱いから、どのような利点が学問一般に対して生じるだろうか。— またしても、このような問いは学問の真の精神を把握したものから生じたのではないことがすぐにわかる。学問の別の対象に対すると同時に、

---

を批判的にえり分け、その立場にしたがって処理しなければならない。



そこから間接的に学問の全領域に対して広範囲に光を当てることなしに、とにかく何らかの方法で学術研究の領域に属している対象が詳細に解明され検討されることはどのようにして可能なのか。——学問の王国では何も分離されないし、そこでは何も個別化されない。むしろ、あらゆる学問は絶え間なく影響を与え合い、一つの内的調和を通じて相互に結びつけられている。——しかし、一つの原理に属する人間的認識の主要部門を、その全体的拡張のなかで、そしてその主要部門と接触し関係するすべてのものとともに統合すること、その普遍性のなかで発展させること、そしてその概念へと戻すこと、それゆえかつての時代の賛嘆すべき目論見が個別的に達成し集めたものを——考え抜かれた統一性へ向けて結びつけることこそ、われわれの時代の課題であり使命である。とはいえ、最初期の時代から人間精神の発展の歴史における根本的学問の達成に向けて、今日では研究者の眼はとくにオリエンツ、すなわちこの人間的文化の発祥地、このあり余る偉大さと崇高さをもった源泉へと向けられている。そうであるならば、Judenthum、この生气に溢れもつとも遠くにまで植えられた東洋の果実を純粹に学問的観点から根本的考察にしたがわせるべき時ではないだろうか。あるいは、人はヒンドゥー教徒やペルシア人における未知の事柄や遠くにあるものの魅力に対して、より近くにあり接近しやすいJudenthumの宝庫を取り扱わずに放置すべきなのか。あるいは、もはや後者からは収穫物は期待されず、すでに使い果たされたとも言うのだろうか。こんなことを信じ込む者は、この収穫物がもっている内容の豊かさを知らない。

しかし、Judenthumは単に歴史的関心をもっているだけではないし、それは過ぎ去ったかつての歴史の頁によって保存されたにすぎない原理ではない。Judenthumはいまなお生きており、数を基準としても人類における、またヨーロッパの人類においてさえ、些細ではない不可欠の部分からもまた認められている。その上、人類はヨーロッパの諸民族に対する、このような古代の生ける証言者の立場について議論している。さらに多くの点と同様に、ここでは中世の諸制度はそれが適用される可能性を失った。人類の立場は変化しているが、いまだにより安定したものにはなっていない

い。ユダヤ人の状況についてもまた、人はいまだに全般的に当てはまる原理を見つけていなかった。もしこのような主題に対する正しい決定がいつかなされるのであれば、それは学問的方法による以外のものではありえないだろう。Judenthum の学術研究はユダヤ人の価値と無価値、すなわち他の市民と同等に尊重され、同等の立場におかれることができるのか、またはできないのかということについて決定しなければならない。このような学術研究だけが Judenthum の内的性質を知り、本質的なものを偶然的なものから、根源的なものを加えられたものから分離することを教える。学問だけが低俗な生の党派性、熱中、偏見を越えている。なぜなら学問の目標は真理 (die Wahrheit) だからである。まさにわたしが考えているのは本来の学問、自由な学問、無限の学問、〈高みにある学問、天の女神〉であり、空虚な推論、つまり利己心、支配欲、ねたみや虚栄心といったあらかじめ抱かれた意見も属するような個別的意見の恣意的関係のなかにあるにすぎない自称学問、偽りの学問ではない。このような学問は発展する代わりに、いつも主張するだけであり、その対象の内的概念に基づく代わりに、大衆の只中でとにかく習慣になっているイメージの権威に依存している。真の学問は、このような敵対者と関係をもつことはない。なぜなら夜は始まりつつある日の前では消えてしまうように、敵対者も真の学問の前では姿を消してしまうからである。

手短かに示唆すべき側面がまだ残っているが、それを考慮すれば、ユダヤ学の基礎づけはわれわれの時代の不可避の要件に思える。これはユダヤ人自身の内的世界である。この世界もまた、精神の止むことのない進歩によって、またその進歩と結びついた諸民族の生つまりその内部における変化によってさまざまな仕方で動揺させられ震撼させられている。いたるところで次のことが示されている。すなわち、Judenthum の根本原理はふたたび内的な欲求のなかに含まれており、時代精神にしたがってある形態に向けて発展しようとしている。しかし、時代にふさわしい仕方で (Zeitgemäß), この発展は学問の方法に基づいてのみ生じることができる。なぜなら学問性の立場はわれわれの時代の独自の立場だからである。いま

やユダヤ学の形成はユダヤ人自身の本質的・必要であるがゆえに、諸学問の領域はあらゆる人間に共通する場所ではあるものの、ユダヤ人という人間はとくにその学問に取り組むことに対して召命を与えられていることは明らかである。ユダヤ人は、人類の共通の活動的成果に対する活発な同労者としての真価をふたたび発揮しなければならない。ユダヤ人はみずからとその原理を学問の立場に高めなければならない。なぜなら、これがヨーロッパ的生の立場だからである。このような立場に基づいて、ユダヤ人と Judenthum がこれまで外部世界に向けて立たされていた異質者であるような状況は——消滅すべきであり、かつて一つのきずなが人類全体を結びつけていたというならば、それは学問のきずなであり、純粋な理性性のきずなであり、真理のきずなである。

\*本研究は、JSPS 科研費 17K0226102 ならびに学校法人北海学園在外研修制度（令和元年～令和2年）の助成を受けて発表されたものです。